
IS P

鈍亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S P

【Nコード】

N 7 5 7 0 Q

【作者名】

鈍亀

【あらすじ】

自己進化型兵器と言えはこいつだろ！と言う思いと勢いで生まれた不定期更新二次創作

警告タグの基準がよーわからんので、保険的にタグ適用してますよ

0 (前書き)

ビバご都合主義+短いです。

— 0 —

(無いわー、うん、これは無い)

目が覚めるとそこは真っ暗な部屋でした、と。

まあ、それは良い(良くないけど)として、なんか体動かないんですけどー、しかも水の中にいるみたいなんですけどー

……(何で息出来んだよっ!)

『ソレハ、アナタニ繋がレタコードカラ必要ナ諸々ガ流シ込マレテイルカラデス』

(はぁ? コード? え…? ギャグ?)

『何ヲ言ツテイルノデスカ』

(いや、だってそんな感じしないよ? あと、此处は何処で、貴方はどちらさん?)

『…今、明カリヲ点ケマス』

その言葉とともに眩い光が空間に満ちる、「」が突然の光に眩んだ視界を取り戻す間にも周囲からは様々な音が響いてくる、目の眩みが収まるにつれ「」は覚えの無い状況、指先一つ動かさない体に恐怖を覚え、目を開けるのを躊躇いだしていた。眠っている間に地震でも起きたのだろうか、目を開けると自分の手足は無くなっていて、だから動けなかったのだろうか、と。しかし、何時までも此の俤ではいられない、先ほどからこちらに問いかける声が聞こえている、しかしこの声がまた曲者だった、機械で無理やりに作った合成音のような声で、この状況の異常さに拍車をかけている。だが、先の会話(?)

から考えるに話は通じるようだというのもまた事実、意を決して目を開けるとそこには————

「」の予想はある意味で当たっていた、「」の予想と違ったのは手足だけでなく髪の手先に至るまで全身が、永遠に失われたという事だった。そしてそれを目にした瞬間「」は意識を失った。

面倒な事になった、地下に続く階段を発見したという報告を受けて彼が感じたのはそれだけだった。彼がそう思うのも無理は無いだろう、何せこの施設から見つかるものは、それが有益であればあるほど「彼ら」の価値を押し下げる、何せ此処はISの違法研究施設なのだ、最近噂の未登録コアの製造法でも見つければ、歩兵戦力としてギリギリで保たれている「彼ら」の存在意義は地に堕ちる。現時点で探索が完了している区画に通じる階段であれば何事も無く引き上げる事が出来るが、それは無いだろう、彼の部下はそんな無能ではない、彼は重い腰を上げると未探索区画への侵入及び探索を支持するために部下の元へ向かった。

こうして「」のあずかり知らぬところで学園ハーレムメカアクションへの扉が開かれた。しかしまだ、しばらくは浅いまどろみの中で目覚める時を待っている…。

0 (後書き)

最後の文の示す通り、シリアスとかないです。
処女作につき、誤字脱字、改行が読みづらい等ありましたら、感想
のほうでそつと教えてください。

次からご都合前回だよ☆ミ

1 (前書き)

テンプレランドはじまるよー

わあい (シヨタキャラは居ないよ!)

—1—

「げえっ、関羽!？」

おー、やっとなるやっとなる。あいつがこれからハーレムを築いていくのかと思うと、胸が熱くなるな。

《嫉妬ですか?》

(いや、ハーレムとか私のスペックじゃ無理ゲーだから、て言うか会話用じゃない思考を読み取るのはやめてよアイちゃん)

《今の貴女では、女性との恋愛はハードルが上がっていますしね。それと先ほどの要求は却下します》

(わー、マジおーぼーさすがアイちゃんだー)

前回の引きから時間飛びすぎだろ、とか原作主人公初登場の台詞がそれかよ、とかいろいろと言いたい事はあると思う、で、まああの後、何が起こったのかというところ——

——そう、あれは8,812,800秒……いや102日前だったか。まあいい、私にとってはつい4ヶ月前の出来事だが、君たちにとっては多分、読みなれたテンプレな出来事だ。——

「はよう起きんか、ワシも暇ではないんじゃないぞ」

つまぶ

「つうう、まだ眠……い……っ!?!?っ!?!」

っはあー、よかったー夢かあ、ふうー……寝よ」

「起きんか」

え? 誰? 何で俺の部屋に居んの? まさか強と「はあ、仕方ないの。

……ハッ」あれ?

「えーと、どちらさんでしょうか? それと、なんか俺にしました?」

「ようやく話が出来るようになったようじゃの。ワシはまあ、管理

人みたいなもんじゃよ。それと、錯乱しそうじゃったからの、落착させるために手の平にある思考能力を司るツボをつかせてもらったぞ。」

「はあ、えーと管理人さんがなんで俺の部屋に？そもそも家は一軒家のはずですけど」

「ここはお前さんの部屋ではなく、それを模した別の空間じゃよ。ワシが念じれば：ホレこの通りじゃ、お前さんが落ち着けるようにと思ってあーしたんじゃが、逆効果だったようじゃのう」

「（っ！て、何で東京タワーなんだよ…）お手数お掛けした様で…、ってそうじゃなくて何で俺はこんなところに？自分の部屋で寝たはずですが？」

「まあ、なんと言えば良いのかの、お前さんはとんでもなく運が悪かったんじゃよ、お前さんが眠っておるときに、その部屋に穴が開いての、お前さんはそこに落っこちてしまったと言うわけじゃ」

「え？じゃあ俺死んじやったんですか？え？て言う事は管理人さんは管理人さんじゃなくて閻魔様ですか？」

「あー、ちゃうちゃう。そういう穴じゃなくての、うーん…そうじゃ、なお前さんにわかりやすく言うとき空乱流とかそんな感じの穴じゃよ。その穴はすぐに塞いだんじゃが、穴に落ちたお前さんを引っ張り挙げたら中身がなくなっておってな、ようやくみつけた中身のお前さんに現状を説明してやろうと思って、こうして場を設けておると言うわけじゃ、だからお前さんは死んでおらんよ」

「成るほどお。まあでも、死んでないってことは中身…まあ魂とかそういうのですか？それを戻せば問題ないんじゃないんですかわざわざこうして説明なんかしなくても。あー、それとも体に戻るには生命の玉を四つ集めるまで働かないといけないとかの条件でもあるんですか？」

「そうではなくての、さっきも言ったがお前さんはとんでもなく運が悪くての、それこそただ死んだだけならこんな事故じゃし生き返らせてやれば良いだけなんじゃが…。落ちた先にあった体に癒着し

てしまった様での、そちらの世界に定着してしまったんじゃよ。その状態のお前さんをこちらに戻すと、あー：歪みが生じてしまったの、両方の世界で悪影響が出るんじゃよ。今の体からお前さんを抜き出そうとしたんじゃが：、どうも元の体以上に馴染んでしまっ
とるようでの、無理に抜き出そうとすると千切れてしまう程でな、すまんが新たな世界で生きていってもらう事になるんじゃ」

「なっ！あ、悪影響ってのはどうにかならないんですか！」

「中身だけであればどうとでもなったんじゃが、お前さんはもう別の世界の住人として定着してしまっておる。それを無理に移せば、双方の世界でお前さんが落ちたような穴が大量に開く事になってしまうんじゃよ。これを容認する事は出来ん」

「そんな：

：っ、でも、今の体ってあの（：）体でしょう？あんなか「わかっておる」え？」

「さすがにあの体で生きて行けといって放っぱり出すのはかわいそうじゃと言う事になっての、ちょうど良くお前さんと一緒に穴に落ちた物が大量にあったのでな、それらと落ちた先にあったガラクタを併せてお前さんをサポートするためのモノを作っておいたでな、ちょうどお前さんが気絶する前に話しとったものがそうじゃよ。ワシはよう判らんが、妙に張り切ってアレを作った者が言うには『いたーねさいん』と言えば通じると言っておったよ」

「！！、！！！！、ツ~~~~！！」

あ、あなたが神か！」

「うおっ、突然どうしたのじゃ？まあ、お前さんからすると、神と言うのもあながち間違いではないがの。いたーねさいんと言うのはそんなにいいものじゃったのかの？「h a i ! !」そ、そうかの、んっうん、では説明を続けるぞ。お前さんの定着した体は人工的に作られた体の様でな、どうやら機械との親和性を高めるために遺伝子から弄っていた様での、免疫機能等の生きるのに必要な機能の大部分をあの繋がれた機械に頼っていたようでな、後付けでの補

助なしではこの先生きのこる事すら困難じゃろうと言う事で、さっき言ったサポーターにはその辺りの機能も付加してあるから、手放さんようにの「それをてばなすなんてとんでもない！」う、うむ。

あとは、サポーターを作るときに使ったガラクタと言うのがAI付きのパワードスーツのような物らしくての、少々の荒事であれば目覚めてすぐでも対応出来ると言うておったよ。あと何か聞いておきたい事はあるかの、目が覚めたらもうワシとは話せんからの」

「えーと、その落ちた先の世界っていうのは所謂SFみたいな世界なんでしょうか？それとインターネサインのAIは事情を知っているんですか？」

「ふむ、技術はかなり進んでおるようじゃが、日常で理解できなくて困るというほどの違いは無いようじゃよ。それとAIはお前さんが穴に落ちたことを知っておる、作ったときにそれなりの情報を入れておったようじゃから、なにかあったら頼るとええよ。それとな、言い忘れておったがお前さんが元居た世界では、お前さん以外は怪我一つしとらんから安心せい」

「そうですか、良かった…。それじゃ最後に、…その、新しい体の元の持ち主は？」

「うむ、あの体は機械で無理やり生かされておっただけでの、そもそも中身が入っておらんかったんじゃ、だからこそお前さんがあも早く馴染んだのかもしれないがな。じゃから、そういう心配はせんで良いぞ、お前さんが入ったときには破棄される直前じゃった様じゃしな」

「そう…ですか…判りました、有難うございます。…もう、質問はありません」

「そうかそうか、では目覚めさせるぞ。達者での」

「はい！」

———光に包まれ青年が消えた後、一人残った老人は青年が居た場所を暫し見つめた後、同じように消えていった———

（あー、やっぱり夢じゃなかったかー）

「おはようございます、現状に対する説明は必要ですか？」

「…インターネサインか、うん、俺が気絶した後どうなったのか簡単な説明を頼めるか」

己以外誰も居ない室内、そこに突然響いた声に驚き、しかしすぐに納得したように頷き、彼女は、今現在唯一信頼できる味方として、インターネサインに状況の説明を求めた。先ほどまで話していた自称・管理人の言葉を疑う気はなかった、自分を騙すことは無いと言う奇妙な確信があったのだ。

「貴女が意識を失った後に、あの部屋に国連所属の調査部隊が突入してきました。その部隊によって保護された後、この病院へ監視付きで搬送されて三日がたった、といった所です」

「監視：って事は、俺はなんか疑われてんのか？あとその声は？」

「あのままでは円滑な交流に差支えが出ると判断し、ソフト・ハードの両面を改良しました。それと、貴女の保護された場所は、国際的な犯罪組織と繋がりがあった研究施設だったようで、万が一繋がりがあった時のためと、研究成果を狙う者に対する対処も兼ねているようです」《とは言え、この三日間に、ある程度貴女の扱いは決定されたようで、大人しくしていれば問題はありませんよ》

（？…まあ、とりあえずは判った。で、俺の扱いって言うのはどうなるの？）

突然脳内に響くように切り替わった音声に戸惑いつつも、疑問を投げかけ、問答は彼女が目覚めた事を知った責任者が部屋に訪れるまで続き――――

（今に至る、と）

《何がですか？》

（いや、今までのことを振り返って《そんな事よりそろそろ貴女の

番ですよ」うう、アイちゃんが聞いたのに」

「――しくね」

アイちゃんの言った通り、いつの間にか私の順番が回ってきていたようで、前の席の生徒が自己紹介をしていた。といっても、まったく聞いていなくてその紹介も終わってしまったようだが、まあ、良い。とりあえず名前と、趣味を言えば良いだろうし他人の言った事を態々参考にするほどの事でもな《体のことと、私の紹介もですよ》：またですか。

（えー、でもS《早く立ち上がらないと怒られますよ》へいへい、：はあ）

教室中の視線が一人に集まっている、織斑一夏もまた、その視線の主の一人だった。

（やっぱり体調が悪いんじゃないのか？）

彼がそう思うのも無理は無い、何せ今この教室の注目を一身に浴びている少女は、有体に言っておよそまともな健康状態とは言えない姿だった。

髪に艶は無く、血の気の失せた肌に目の下の濃い隈、視線は中空を彷徨い状況を認識しているのかも疑わしい。そろそろ一声かけるべきか、と彼の姉が動こうとしたちょうどその瞬間、すっ…、と静かに立ち上がり、しかし視線は何処とも無く彷徨わせたまま、あのなんとも言えない空白が無かったかのように自己紹介が、始まった。「アイビス・レイヤードです。趣味は動物モノのドキュメンタリーを見る事、体が余り強くないので迷惑を掛けるかと思いますが、宜しくおねごうっ……うー、その…専用ISは『パルヴァライザ』です。改めて宜しくお願いします」

簡潔な紹介、途中少し詰まったようだが緊張して台詞が抜けてしまったのだろう。織斑一夏は、その程度にしか考えなかった、が、当然周囲は違う。件の生徒がまた音も無く着席し、目を見開いた、或いは固まった他の生徒等の様子に、さすがにおかしいと感じ始め

た頃

「「「「「なっ、なんだってエ——！！！！」」」」」

：どうやらあのアイビス・レイヤードという生徒は何か驚くような事を言ったらしい、とやはり暢気に考えていた。ハーレムを作る漢は、やはり器が違うぜ、等と教室を混乱の渦に陥れた張本人からある種の生温い感動を向けられているとは思ってもいいようであった。

1 (後書き)

今日は、もうちっただけ続くんじゃないよ

設定その他殴り書き（ちよろちよろ更新）（前書き）

現時系列での未登場キャラについての情報もあるので注意、あとあまり真に受けないようにしてください。

設定メモから設定メモ殴り書きにワープ退化しました。

設定その他殴り書き（ちよろちよろ更新）

設定と解説

0の最後のおっちゃん

主人公の全裸を間近で目撃した男たちの代表、この世界の数少ないダンディ要員だが二度と登場しないし、名前も無い所謂モブキャラ。

管理人さん

神様の存在、特殊な幼稚園を卒園する時に特殊なバッチもらった筆頭卒園生がたどり着く最後の姿…という設定は無く、単純にこの作品におけるご都合主義の結晶。彼と愉快な仲間たちの哀れみと慈悲の心、それにほんのちよつとの遊び心で主人公は衰弱死を免れた。当然二度と登場しない。

IS学園

メインの舞台。基本女子校。

インターネサイン（アイちゃん）

原作（ACLR）と違い、喋れる。当然それは上記の愉快的仲間たちによる魔改造の結果、原作との最大の違いは優先順位が一番上が主人公の介護・保護になっている点、戦力の拡充等は二番以下に転落した。毎回インターネサインというのは噛みそうだからと、主人公はアイちゃんと呼んでいる。今作において唯一ぬにのヒロイン。

3で相応の独占欲（のような物）を見せる。もし、仮に、万が一擬人化した場合は両腕に装備した電動射突型物理ブレードで主人公のシールドをダブルブレイクして、ノクターン逝きにする。攻略される側ではなく、攻略する側。

アイビス・レイヤード

主人公、原作については一度五巻まで通して読んだきりで大雑把にしか覚えていない。ギガゾンビ編の現地住民の如く時空の穴に飲み込まれて、貧弱ボディに憑依してしまった元男。国籍は無く卒業までに所属国家を決めるように言われている。ザ・ニューボディの外見は不健康に白い肌と艶の無い白髪に、そこだけは明るい色合いの緑の瞳、体格は小柄で吹けば飛びそうな印象を見るものに与える。インターネサインが補助を打ち切った場合、ラーメンが作れないのを通り越して1〜2分で衰弱死する。ただでさえ貧弱な体だがナノマシンが複数種類投与されており、その負荷で貧弱さに拍車が掛かっている、IS展開時はご都合主義的に戦闘が可能だが、普段は振動・温度変化等に弱く緊急時に至っては瞳が緑から赤に変わる初期生産型箱〇体質。生活は大部分をこれまたインターネサインに頼っており、正しく虚弱貧弱無知無能な人の子状態、実は時間を掛ければ体質を改善する事も可能だがそれに気づいていない。インターネサインも聞かれない限りその事をいう気は無い。

2本編後高速機動で酔って、セーラさんばりにグロツた。が、その結果P様の強化改造権と、ほんのちよつとだけ健康な体を得た。機能しているが表に出ない設定や、死に設定で重量過多。

織斑千冬

面倒くさい事情のある主人公が居るため、原作よりも忙しい。ある意味で主人公の出現による影響が最も顕著。最近胃が痛い。

山田真耶

原作より少し忙しい。

織斑一夏

稀少技能『恋愛原子核』に類似する特性を持った、学園ハーレム型原作主人公であり、当然パッシヴスキル『鈍感』『八方美人』を

搭載している。

3にて主人公の此方での『はじめてのおともだち』枠獲得、強化フラグが立ち4でスピード回収。

さらに、好感度の上昇でルート確定（友情）このままEDに言った場合は夕日を背に坂の上に立った主人公が、「一夏の事は、世界で三番目に嫌いじゃない」の名作再現が発生するレベル。

更識楯無

生徒会長。当然主人公との面識は無い、が個人情報を含む主人公の詳細なプロフィールは把握しており、軽く警戒気味。最近忙しい、寝不足。

学園内最強であると同時に、鈍亀に大打撃を与えた専用IS『ミステリアス・レイディ』を使用する。このISのカラーリングに気がついたときは思考が一時停止した。

セシリア・オルコット

ちよろかわいい

納豆レーザーに続いてBT二号機まで出てきてドルチルマジベこみ状態

鈍亀が変態なため、鼯鼠のされ方がむしろマイナス。

篠ノ之箒

主人公に対しては、なんか変なやつがいる、以外の感情はない。その他は原作同様。

3にて危機感ビンビン丸、4でさらに上昇、例のアレの登場が早まる

篠ノ之束

妙なISの情報を掴んで一瞬考えたが、ご都合主義的に放置。

急ピッチで作業中、今の姿なら原作初期の容姿説明にも納得が行

く、と言うレベルで徹夜中

シャルロット・デュノア

鈍亀のお気に入り、無理やり話に絡めて強化フラグを立てた。

凰鈴音

大陸からやって来た、酢豚のアルター使い

4 終盤で主人公に対して脅威を感じる様になった。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ヒロイン勢の中ではおそらく最強。

部下の毒電波に侵されて、自分の武器に香ばしい名前をつけている。

主人公に関しては、かなり詳しい情報を持たされているが、個人としては思うところはない。

各国の偉い人々

主人公の所属する国家はISの保有数が将来的に一機増える事になるので、色々と便宜を図って自国に所属させようと画策中。国民の一人にしちまえばこっちのモンよ、から数十年後への布石など、主人公をどう扱うかについての考えは様々。

2の模擬戦スタンスが変化、戦力としても期待するようになった。

3と4のプレゼントで、劇的な変化。今後直接絡んでくる可能性が出てきた。

亡国機業

何がやりたいのか良くわからん悪の秘密結社の何か。同じタスクでもビッグ・タスクとは大違いで扱いづらい。

課と思ったら案外使えた（囃ませ犬的に）。

スコール

上記組織の構成員、えらい、つよい。顔に傷跡が有ったりはしない。

オータム

したっぱ。現時点では、多分スコールとにやんにやんしてる。原作通りの装備の場合、主人公一撃死 も有り得る。

エム

よーわからん。今後の原作設定によってはこの話の設定に致命傷を与えかねない危険人物。

4にて魔改造が確定した。

IS

すげーパワードスーツ。LEDミラージュみたいなもん。

ミステリアス・レイディ

生徒会長の専用IS、つよい。この二次創作的にカラーリングがやばい。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムII

漢のパイル。原作でセカンド・シフトした場合のカラーリングを考えると不安になってくる困ったちゃん予備軍。

パルヴァライザー

インターネサイン製作時にISの出来損ないが使用された結果、ご都合主義的にISとして認識されている。実際は別物、インターネサインの開発力が愉快的仲間たちによって大幅に強化されているので、今 作においてはデータが集まることに他ISの機能をコピー・強化して適用していくアプトムの機体。2の 時点での外観

はフロートパルの脚部に飛行パルが乗ったカメラ機体、脚部の突起はネオゼクトールのなアサルト・ラムとして機能する、鈍亀の妄想の権化。話が進むごとに形や機能も変わる。地味に3でPICを実装した。

設定その他殴り書き（ちよろちよろ更新）（後書き）

一つ重要な言い訳を、0話で未登録コアについての記述がありました。が、原作登場前から噂程度はあった、として置いてください。勢いで書いてるので1話書いてる途中に気づいて焦りました。

2 (前書き)

曲がり辛いBT兵器が、セシリアさんに掛かれば独楽鼠のようにクルクルと曲がるんだ——という夢を見た鈍亀です。

いやあ、就職活動は強敵でしたね。と言うわけで、更新大分遅れました、すいません…。でも不定期更新なのでこれからもこういう事あるかも知れません。…と言うか上記の通りしばらくはこんな感じですよ。

それはさておき、本編です。

—2—

「日本の男子はジョークセンスがあるのね」

(オルコットエ…)

あの自己紹介の後、女子に難癖でもつけられやしないかとビクビクしつつ、主人公…はさすがになんだから、…織斑、そう、織斑絡みの騒ぎで全員こっちの事は忘れてくれたみたいで何とかなっていたんだが…。

(あの金髪ヒロインじゃねえのかよ、喧嘩売りまくりじゃねえか)

《何か問題があるのですか?》

大問題である、しばらくは学園ハーレムを眺めて楽しむ予定だったというのに、あの金髪ときたら!

…それとも、元からこうだったか? 一回しか読んでいないから流れすらわからん…。

《余り良い趣味とはいえませんが…。あと、先ほどから呼ばれていますよ》

(ん?)

「もう!聞こえていませんの!?!」

(うわあ…)

見上げれば

英国代表候補生セシリア・オルコットがこちらを睨み付けていた――

ピーピーピーピーp「んう…」(カチッ)ーピーボボボボボ

喧しい目覚ましのアラームに促され、体を起こす。

(決闘かー、メンドクセー)

あれから十日、あの時はどうもずいぶん長い事、彼女を無視する形

になっていたらしい。返事を返すと随分怒っていた、…と言うか、喧嘩（決闘らしいが…）を売られた。

周りの連中は止めるそぶりも見せなかったし…仮にも自己紹介では体が弱いと言ったのだから、誰か一人位は止めてくれても良いだろうに。

へまだ言っているのですか？今日はもう、模擬戦の予定日です。

私たちは余りに低く見られすぎています、今回の模擬戦闘は力を示す良い機会です。▽

アイちゃんもセシリアの挑発が、上手い事琴線に触れたようでヤル気を出してしまったし…やり過ぎると不味い気がするんだg（問題はありません、ISには特殊な保護機構が標準装備されていますので、やり過ぎると言う事はありません）いや、それが必要なほど追い詰めるのこそ不味いd（問題ありません）……

へ私が問題無いと言ったら問題は無いのです。そうでしょう？アイビス▽

「！、…ハハッ、そうだな。その通りだなアイちゃん」

へ私は面白い事を言ったつもりはありませんが…▽

「いやいや、何でもないよ。それよりも速くしないと遅刻しちゃうし、行こう」

へまあ、良いでしょう。それと、今更ですがおはようございます▽

「ん、おはようアイちゃん——」

——結局遅刻した。あの後もなんだかんだと話し込んだのが不味かった、不幸せなときにはもう気付いても手遅れ、と言う通り、気付いたときにはもう朝礼十分前着替えすら終わっていないかった物だから、普段は杖を突きながらゆっくり歩くところを、走ってきたのだが。

間に合わなかった、…だけでなく、この体で走るのが始めてだったのもあり、足を縛れさせてこけた、しかも階段で。担任のあの、気が削がれた様な呆れた表情がまた…ッ、うぎぎ。おのれオルコット！

《ハア…》——

放課後、こんなアホな理由（八つ当たり）で対戦相手が繊維を滾らせているとは露知らず、アリーナへと向かうセシリア・オルコットは気になるアノ子（織斑一夏）に良いところを見せようと張り切っていた。

とはいえ、油断ないしは慢心している訳ではなかった。何せズブの素人に、敗北寸前まで追い詰められたのはつい先日、そうそうあり得る事ではないがああ雪片式型の様な自らのIS・ブルーティアーズの死角を着くような特性を持っている可能性もある。故にセシリアはBTの戦闘の基本、6基のビットをフルに活用した同時多角攻撃で速攻を掛けるつもりだった。当たり前の事を、当たり前にこなして勝つ、セシリア・オルコットは中距離戦闘の鉄人なのだ。

「あら…、もう来ていたのですかレイヤードさん。」

「……」

「まただんまりですか？…まあ、良いですわ。」

……試合前に言うのもなんですけれど、あの時は言い過ぎました、無視されたとは言えあなたのISにまでケチを付けたのはやり過ぎでしたわ。すいませんでした…」

「（突然しおらしくなりすぎだろ）…いえ、私も無視をするような形になって…申し訳ありませんでした」

「そうですか……えーっと…」

ああっ、もうっ！やっぱ試合の後に言うべきでしたわ！

とにかく、負けませんわよ！」

「は、はあ」

「もう！何です、そのやる気のない声は！手を抜いたりしたら許し

ませんからね！」

「手抜きなどしませんよ。それに、勝つのはこちらです」

「言いますわね。まあ良いでしょう、ではまた10分後にアリーナで。」

どちらが正しいかは、闘いで決めましょう」

意識を切り替えたセシリアは、ピットゲートに向かいながら、まだ見ぬアイビス・レイヤードのISについて考える。

そう、宣戦布告から10日たった今も、彼女のISについて戦闘スタイルやスペックはもちろんの事、その姿形すらも判っていない。織斑一夏と同じく、実機でのIS訓練を行っていないのだ。

とはいえ、あの自信から彼女が余程の馬鹿でもない限り、相応の能力があるのだろう。パルヴァライザーと言う名のISの存在を自分分は聞いた事が無い。代表候補生である自分に情報が来ていないと言う事は、まず間違いなく第三世代。となれば、自分のBTのように特殊な機能を有しているはず。と、ここまで考えて頭を振る。あは言ったが、相手の能力など関係ない、BT兵器による開幕速攻で防御ごと削りきる。性能については試合の後にも話せて聞けば良い、思ったよりも話は通じるようだし、少なくとも触り程度なら聞く事が出来るだろう。

解らない事を何時までも考えていてもしょうがない。もうピットゲートは目の前まで来ている、後五分ほどあるが、先にアリーナに入って待ち構えておくでしょう。――――

――――織斑一夏は、クラス一同と共にアリーナへ観戦に来ていた。先日、同じ第三アリーナで対戦したセシリア・オルコットからは是非にと頼まれた、だけでなく自分と同じように、あの日セシリア（そう呼ぶように言われた）と決闘をする事になってしまったアイビス・レイヤードの事が気になったからだ。

「千冬姉、まだ揃ってないけど、どっちが勝つと思う？」

——パアニ！

「織斑先生と呼べと言っているだろう」

「がああああ！」

（（（うああ））））

「まったく…、どちらが勝つかは判らん。レイヤードのISがどんな物かも判っていないからな」

「レイヤードさんのIS、先生も知らないんですかー？」

「レイヤードさんは、少し事情がありますからね」

「えー？事情ってd「それは本人に聴け。それと、ゲートが開くぞ」
はい」

ゆっくりとピットゲートが開く、そこから飛び出たISを見てその場にいる全員が息を呑む、そこにあったのは異形のISであった――

――口元以外を覆うほぼフルスキンの装甲、左右共に通常の腕部ではなく肘の辺りからは大型のブレードが展開され、青く輝いている。脚は殆ど棒に近い代物で膝を曲げる事も出来ないだろう、さらにはその脚の間からは長大な突起。機体の後ろには二基の大型ブースターに同じく二本の排煙筒の様なパーツ、さらに尻尾の様なパーツまで伸び、その尻尾が途中で五本のアームに分れ二本は左右の肩の上から、また二本は機体両サイドから、最後の一本は他の四本とは違い先が尖っていて、海老の尻尾のように機体の下を潜って前方へ突き出されている。そしてその機体の纏う異様な気配、それが同じく背中から装甲脚を生やしているアメリカの第二世代の劣化コピーないしは上位互換であることを否定する。アレはもっと――

「コレがパルヴァライザーだ、私はついにこいつと一体となった、もう誰にも私をとめる事は出来ない」

その言葉で意識が引き戻される、どうやら彼女自身あのISを展開するのは初めてのようで、言いつつ体を見回している。アレは彼女の持ち込んだISでは無かったのか。

「…っ、ようやく来ましたわね。時間ギリギリですわよ」

「時間には間に合っただろう？」

「全く…、それでは早速始めましょうか！」

そう言い放つと同時に、セシリアのブルーティアーズから六基のビットが放たれ、レイヤードを包囲する。途端始まる一斉射、いきなりの事に反応できなかったのか、レーザー・ミサイル共に全弾が命中する。全員が崩れ逝くパルヴァライザーを幻視した、それほどの猛攻、しかしブザーは鳴らない、決着を知らせるブザーは鳴らない。その事に気づいたセシリアがビットを戻そうとするも、それは遅きに失した。着弾したミサイルの煙の中から、軽くそれでいて鈍い独特の音と共に赤い閃きが奔る、それとほぼ同時に五基のビットが落ちた。その事に動揺し残った一基の制御が乱れる――

――ブォン

（ッ！速ッ…！）

気付けば残ったビットが浮いていた場所には、青い軌跡と異形のIS。セシリア・オルコットは、ブルーティアーズは、その名の由来となった兵器を一瞬にして失った。

（くっ、距離を…！）

ただでさえ得意とはいえない格闘戦、しかも今はインターセプターをコールする時間も無い、実質残った武器は大型レーザーライフルのスターライトmk？を最大限生かすには距離を取る必要がある。全速で後退、アレだけの瞬発力から逃げ切れるか、と言う不安を余所に、あっさりと距離を取る事に成功する。見逃されたのだ、そう気付いたときには既に引き金を引いていた。

しかし放たれた光は届く前に、相手の覆うように展開された光壁に阻まれる。

「っ、アレで攻撃を…！」

「その通り、大正解。景品はコレだ、墜ちろ」

言葉と共に放たれる緑の光球、尾を引くように飛来する大量のそれをかわし、反撃を――

「ぐっ…、偏差射撃！？そんな、何故…？かはッ」

追撃、機体前面で束ねられた五本のアームから放たれた三発のレーザー、それを全て受けたブルーティアーズが力を失いステージに倒れこむ中、敗北を告げる音が鳴り響いた。

2 (後書き)

妄想のアウトプットが上手くない…。

言い訳終わり。さて、今回セシリアさんフルボッコ回でしたが別にセシリアさんが嫌いとか、そう言う訳じゃないよ本当だよ。どっちかって言うところ率二位ぐらいに好きな原作ヒロインなんですがね。あと、感想への返信でオービット出すよ！と言いましたが、書いてるうちにフロパルオービットのシーンが赤レーザーに置き換わっちゃいました申し訳ない。いつか出します。

3 (前書き)

地球人になったり、火星に移住したり、また地球に戻ったりで遅れちゃいました(てへっ

またもや大遅刻である。

とは言え、今回は事前に連絡しているので無問題。久しぶりの学び舎をゆつくりと楽しむ余裕すらある。静かで、豊かで：やはり通学路と言うのはこうでなくてはいけない。

《随分とご機嫌ですね》

「まあね、あの模擬戦の後は正直死ぬかと思ったけど。この数週間でプラスチックとパルヴァライザー弄りもそれなりに進んで、前より少し元気になったからね」

そう、この数週間はIS学園編をお休みして、—50000C編に突入していたのだ。

つまり、アイビスの身体能力が一般人／2になったと言うこと それはともかく ス
ミk

「：何さ」

《今は教室に向かって、誰もいませんよ》

「：何で？休み？」

《今日は第二グラウンドで合同授業だそうです》

「聞いてね」

《言っていませんから》

「何で教えてくれなかったのさ」

《全て私が把握していますから、貴方は知らなくても良いのです》

「：そうかなあ？」

《そうですよ》

「そっかあ」

言いつつ第二グラウンドはもう間近だ、雑談をやめて生徒の一人に向かって歩く。

(えーっと)

《織斑教諭はあちらです、ガイドを表示します》

(さんきゅー、アイちゃん)

「すいません遅れました。：お早う御座います織斑先生」――

――(驚いた)

シャルロット：、この場においてはシャルル・デュノアは密かに独り言ちる。

父から指示された目標、その一方たる織斑一夏には容易く接触できたが、周囲は小規模なハーレム状態。もう一方は欠席：どころか誰も居場所を知らない。挙句、聴けば聴くほどに感じる渡された情報以上のアクの強さ。

まともに接触するだけでも苦勞しそうだと考えていた矢先、やってくれたのだ、例のハーレムマスターが。転入初日、授業も終わろうかと言う頃にやってきたアイビス・レイヤード、そのタイミングで態々登校してきたのにも驚いたが、その後打鉄を格納庫に戻す僅かな時間、織斑教諭に指示されて織斑一夏の班の手伝いをした彼女を放課後の訓練に誘う事に成功したらしい。これでまともに話すのは初めてだったと言うのだから、さすがのハーレムマスターであると感じた。

：とは言え、もはや大した意味は無い。何せ、自分が性別を偽っているのが他でもない織斑一夏にばれてしまったのだから。その上で彼は自分に味方してくれると言った：

(一夏：)――

――(来てしまった)

久しぶりにまともな会話が出来たのが嬉しくてホイホイ約束をしてしまった：。しかもあの時は二倍の気不味さで1v10、いつもの二倍の仏頂面で1v20、さらにいつもの三倍の無口さでぼっちレベルは篠ノ之を越える1v60。そこに掛けられた声はまさに救い

…それが無い寒々s 《嫌なら、断りの電話でも入れれば良いのでは？》

(…嫌じゃあ、無いんだよ。ただ、緊張しているだけで)

《それなら…良いのですが…》

(?、っと、着いたな、ココだ)

「おーい、こっちだー」

声の元に向かって歩いていく、どうやらもう始めていたらしい。

「少し、遅れてしまいましたか？」

「いや、まだ始めたばかりだから大丈夫だ。

それと、さっきも言ったけど無理に敬語なんて使わなくても良いぞ？」

「しかし…

…いや、…解った、素で喋らせて貰う。改めて、今日はヨロシク」

「はは…、むしろ宜しくされるのはこっちだと思うけどな。

俺はISを使い始めてまだ短いからさ、レイヤードさんには色々手間をかける事になるだろうけど、お手柔らかに頼むな」

「ふうん、解った。まあとりあえず、暫くは何が出来るのか見てる

…それと、私のことはアイビスで良い」

「おう、じゃあ俺の事も一夏って呼んでくれよ。

っと、シャルル待たせちゃったな、悪い」

「ううん、大丈夫だよ一夏。

それと、僕の事もシャルルで良いよ、レイヤードさん」

「ん、

私もアイビスで良い、さんも要らない」

そう言って、女三人で暗いオーラ力を放っている方から少し離れた位置に歩いていく。

(さくさくして、ふふっふ)

《随分と、ご機嫌ですね》

(こっちに來てからの第一男友達発見！だからな、コレデ…ぼっちカラ開放…サレ)

《……………》

(何故ツツコマないのか)

《……………》

(…え？ちょ、えっ何で 待って、アイちゃん？え？)

《……ハシヤギ過ぎです

余り、私の事を蔑ろにするのは感心しません》

(…心配するから、拗ねるにしてもこういう拗ね方はもう勘弁しておくれ…)

《なっ…！拗ねてなど

それよりも、そろそろあちらは一段落着くようですよ》

(はいはい) —————

—————「おい、アイビスはなんかあるか？」

「(滅茶苦茶、気使われてるな)ん、そう、だな。

さっきから見ると、飛び道具の類を使ってないみたいなんだけど、それは何で？」

「ああ、その事か、俺の白式はイコライザのインストールが出来ないらしくてさ」

「なるほど、ロケもハンドガンも無しのブレオンか、いっそ清々しいな。

でもそれなら…そうだな、銃を撃ったことは？」

「(ブレオン?) ああ、それなら前にシャルルに借りて少しだけ」

「うん、それなら撃たれる前に仕掛けるか、撃たれないように・当たらない様に動くって言うのは考えていると思うけど。

こういうのも有るよ、って言う事で。少し珍しいのを見せる」

以前とは形状の異なる、しかし原形を留めた背部に光が集まり薄緑の箱のようなパーツが、ISに接続された状態で展開される。

「なんか凄そうだけど…それは？」

「WB29M-ECHIDNA、…何が珍しいかと言うと、これは

所謂コンテナミサイルと言うヤツで：

んー、実際に見せたほうが早いかな」

実際に使ってみせるために、仮想敵を投射。

撃ち出した弾が標的の間を通り抜け、その後に展開、24（…）の子弹を放出する。

（…：信じてブツ放したパラサイトミッソーが俺のインターネサインの強化改造にドハマリして元の二倍の子弹ミサイルをばら撒くなんて…）

《時間を有効に活用してみました》

（うん、まあ：休んでる間はDr. 西にきいてみて！位しか見る物無くて暇だったし、仕方ないね…）

「初めは外したのかと思ったけど、確かにコレは凄いな！なるほどなー、ISにはこう言うのもあるんだな」

「！…うん、知らずに避けた気で居たら後ろから…って言う事もありえるから。とは言ってもメジャーな物ではないから、こういうのを警戒しすぎるのも良くないけれど。」

…身近な例だと、私が前に模擬戦をしたISなんかは、避けた後に弾を曲げられて直撃って言うのがありうるから今のところはあの系統にだけ注意して置けば良いと思うよ」

「他にも何かあるのかな？」

「んえ？」

「いや、そのさっき見たいなのは僕も始めて見たからね。」

それに、アレは一夏だけじゃなくて、他のISから見ても注意が必要な物で、しかも珍しかったから、アイビスの他のイコライザも気になっちゃって、…駄目かな？」

「んー（良いかな？アイちゃん）」

《…：今、表示したリストに表示されていない物であれば…まあ、良いでしょう》

「（ありがとっ、アイちゃん）では、幾つか…」

光が集まる、しかし今回は一部では無く、機体の到る所で光が集ま

り、弾けた。

再び、しかし大量に仮想敵を投射し、展開された武装をそれらに向けつつ顔だけを二人に向ける。

「まず〈カーオ　ずしゃーん〉これが、WH04HL-KRSW、着弾時に爆発するハイレーザーが撃てる、一夏の白式なら斬れるだろうけど、斬り損ねるとそれなりに危ない」

「おお」

「で、これが〈ズギユウ　ビシャーン〉YWH16HR-PYTHON、チャージの分、隙がある代わりに弾速・威力・範囲に優れる、見てから動くでは遅いし巻き込まれても危ない」

「おお」

「んでもって、〈ダオン〉WR15S-WYVERN、エネルギーショットガン

……珍しいだけ」

「おおおお」

「…〈ギャラララララララウ〉WH10-SILKY、い（ぐう）ーましんがん。すぐくやかましい」

「うおおおお」

「で、コレが〈ダッ　ガウ〉CR-WBW98LX、重い」

「おおおおおお」

「?…大丈夫?」

「っ!…いや、何だか唾然としたって言うか、ビット飛ばしたり空気砲撃ったり…第三世代って凄いなだな」

「え? 違うよ一夏、IS・パルヴァライザーは第三世代ISじゃないよ」

「そうなのか? あ! じゃあシャルルのISみたいに特別にチューンした第二世代なのか?」

「いや、それも違う。私のパルヴァライザーは分類するなら一夏の白式に近い」

「え? でも白式にはあんなに武器は無いぞ?」

「そういうことではなくて、どちらもワンオフアビリティありきのISだと言う事。

第三世代は特殊機能を搭載して、ワンオフアビリティへの繋ぎにするというのが基本になるから、私と一夏のISは第三世代とは言えない特殊型」

「はー、そうだったのか：ってアイビスもワンオフアビリティが使えるのか！」

「?：うん、前に模擬戦をしたときも使ってたよ?」

「いや、そんな当たり前の事みたいって言われてもな、シャルルだって驚いてるだろ？」

それに、ワンオフアビリティって珍しいんじゃないのか？」

「珍しいよ? だから、それありきの二機は特殊型なんだって言ったんだけど」

「大した事無い様に言うから、一夏はビックリしたんだよ」

苦笑しながら言われ、成る程と肯きを返す。

「でも、どんな効果なんだ? 見た目じゃ解らなかったぞ」

「：さつき見せたイコライザ」

「さつきの：えーとWHO4何とかだとかを媒介にする、零落白夜と同じような使い方なのか？」

「違う、アレはワンオフアビリティで作られたイコライザ。

パルヴァライザーは二次移行無しでも、ワンオフアビリティ『インターネサイン』によって進化と拡張を続ける。だから、今のパルヴァライザーは前よりも少しだけ、でも確実に強い」――――

3 (後書き)

色々言いたい事もあると思うけど、まずは言い訳を聞いてほしい。そう思ってたこの後書きを書いたんだ。だから、まずは何も言わずに読んでくだちい

ハンドレールガンの威力

鈍亀は、フロムマジックが正しくて、ゲーム中の性能はゲームバランス上の補正が掛かっている派なので、OP 準拠です。

ドハマリ

ら、らめえー！みつ、みしゃいる、みしゃいるぱーてい開いちゃうのおー！みたいな

ー50000C

淫天使と迷ったけどこっちのほうが通りが良いかな、と

い(ぐう)ーましんがん

ゲームでの余りの使い辛さに：しょーじきスマンかった、もうしない(と思う)

第三世代の定義

なんかこんな感じの事、原作でも言ってた様な気がするの。言ってたなかったら独自解釈と言う事で。

主人公の態度

ホームシック+諸々で弱ってたところに、ハーレムフェロモンの直撃でぐーんと親近感が上がった、と言う事でひとつ：

リスト

にぶ亀解釈に拠ったIS殺しが載っていた、ECM・熱量武器・特殊ロケット等。

イコライザの製造

インターネサイン本体は、0で得た機能・設備と共にデヴァウアリング・プラズマな空間に広大な土地ごと存在しており、現時点でも大量の戦力が展開可能、という設定。

無人機エ：

早くシャルが出したかった、反省している。

カラサワ

爆風にも威力がある、と言う設定＋原作での戦闘が基本短時間で決着している事から、鈍亀はISの耐久力を高級軍用MTから軽量級AC程度で考えているため。

以上で、言い訳を終了します。

あと、最後の所はペンタゴンのキャラソン中盤の台詞の「必ず倒す！」みたいな余韻があると思うながら読むと良い感じになって誤魔化せる筈。

正直、区切る場所が微妙だとは思ってるんですがね：

4 (前書き)

事実上の序章終了
オリ展開に入ります、
とは言えノンプロットなわけですが

—4—

前回からのあらすじ

ラウラ・箒の、メインヒロインと空気ヒロインの異色のAIC殺法コンビに挑むIS学園ヌーヴォーの一夏とシャルル、早々に箒を下すも強敵ラウラに苦戦する。しかし、一夏の玉砕突きによって流れを引き寄せたヌーヴォーは友情のツープラトンでこれを撃破：したかに思えたその時、これで 終わりとと思ったら、やっぱり出てきたラスボス モード……！！劣化千冬姉のオーバーボディボディを身にまとったラウラは、1000万パワーのIS強度を見せ付け、シャルルをたやすく吹き飛ばすが、最後にはシャルルの力を受け継いだ一夏の渾身の一撃でようやくの決着を迎えたのだった。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

倒れこむラウラを抱きかかえながらそう呟き、シャルル達の方に向かおうとしたその瞬間。

—爆音、衝撃—

「くっ！！」

腕の中のラウラを庇いながら伏せ、次の衝撃に備える、が、何も起こらない。

（前の無人機とは、関係ないのか？）

次第に煙が晴れ、聴覚も戻ってくる。状況を確認するべく顔を上げた先には、もはや見慣れた感のある異形の機体、どうやら庇われたらしい。

「アイビス、助かった。恩に着る」

「まだ早い」

「ん？どういう事だよ？」

「降りてくる、今回は本気らしい」

その言葉に上を見上げると、以前に襲ってきた無人機の姿。しかし数が多い、その数4機。しかもよく見れば、さらに上空には、それらを統率するように通常の有人ISまで居る。

（数が多すぎる！）

「くそっ、これじゃあ…」

「何を言っているのか、何のために私がここに…」

ボーデヴィツヒを連れてアリーナから出る」

「いや、でも」

「…パルヴァライザーには飛び道具がある、

一夏が脱出するまでの間、アレを引き付ける位は問題ない」

「っ、解った！でも無茶するなよ！」

「解ったから速く走れ！」

「おう！」

あっ、それと今度からは変な遠慮なんかしないで今みたいに自然に話せよな！」

自身なりの激励を飛ばし、今度が来るためにも全力で走る。後ろからは轟音が響く、一秒でも速く出口へ、速く着けば着く程アイビスの危険度は下がる、今のアイビスは自分たちへ弾が達するのを防ぐために自由に動く事もままならないのだから。

「っハアッ、これで…！」

アイビス！もういい、退kーガアンツー

なっ、どうして隔壁が！くそッ」――――

――――《織斑一夏の領域離脱を確認》

（全く…ようやく行ったか。

んじゃ、撤退するとしますか）

《これは…扉がロックされています》

「ワナ：か」

「その通りだ、

まんまと騙されてくれたな、罠とも知らずに
だが安心しろ、すぐに楽にしてやろう」

《敵ISを確認、EUの第三世代・ブルーティアーズの同系機と思
われます》

「ふん、乱入してくるとは『アイビス！！』」

スピーカー、と言う事は観察室にでも居るのかな？

一夏、私の声が聞こえているかな？」

『ああ！！聞こえてるぞ！』

今、皆がロックを解除するために動いてるから、

それまで何とか持ち堪えてくれ！！』

「おいおい：心配しなくても大丈夫だよ」

『何言っも何言ってるのさアイビス！』

いくらそのISでもアレだけの数と正面からぶつかって無事で済
む筈無いでしょ！』

そ、そうだぞ、アイビス！』

「はあ：一夏、シャルル、パルヴァライザーの実力を証明してやる。
良く見ておくんだな！」

「話は終わったか？」

「待たせてしまったな」

「かまわん、この程度はサービスと言うヤツだ」

「余裕、だな」

「当然だ、この布陣で負ける筈が無いのだから、なっ」

《敵機はBT技術を応用し、無人機を直接操作しているようです。
無人機とビット兵器を併用した同時攻撃に注意してください》

4機の無人機は散開、内2機が格闘戦を仕掛け足止めを残りの2機
がビットと連携しアリーナ突入時にも使われたエネルギー兵器で攻
撃する。

「おっと、とととっ

危ねえな、やっぱり数が多いとそれだけで避け辛くなるか」

「（今！）足元が留守だぞ？」

「うおっ、と。」

フレキシブルか…なるほど、この数に加えて曲げてくるのか…

スゲーよ、お前は

勝つのは私だけだな」

「ふん、何時まで持つかな？」

無数の弾幕に飲まれて墜ちr馬鹿なっ」

《ビット、残り4機》

「貴様…ッ何をした！」

「…（これは、言うしかねえ！）

フフフ…：メタルジェノサイダー」

「このままではッ

くッ、撤退する」

「逃がすわけが——チッ」

間に割り込み庇う無人機を斬り飛ばし、とっつく。

《敵機の領域離脱を確認

遊びすぎですよ》

「いやあ、あの時は、ああ言うしk「大丈夫ですか〜！レイヤード

さん」遅えっ！——

——ゴシカァン！

（嫁とかwww腹がww振れるwww）

《ハァ…》

——バガン！——

「「「「「あいたっ」「」「」

「はあ、全く、今回はこれで勘弁してろう。

これから私たちは緊急の会議があるので、自習とするが余り騒がないようにな」

「「「「はい……」」」」

「それではこれより自習とする。他の教室に迷惑を掛けないようにしろ」

そう言い残して、教師二人が居なくなる。

次第に活気付く周囲を尻目に、先ほどまで騒ぎを起こしていた集団に近づく。

「大丈夫か一夏？」

「うう、心配してくれるのはお前だけだぜ、アイビス」

（（（（むっ）））））

「なんかさ、話し方が昨日までと違わないかな？」

「ん、シャル、ロットか……まあ、約束、とは違うけど。」

そんなような物だよ」

「や、約束だと！一夏、私と言うものが有りながら、嫁としての自覚が足りんぞ！」

「ばっ、そういうんじゃないよ！」

「信用なりませんわね、レイヤードさん約束と言うのは？」

（頼む！アイビス、マトモな答えを！）

「（これは……）……言わせんなよ、恥ずかしい」

「「「「一夏あッ」」」」

「アイビス……！」

「ああ、解った解った、まじめに話すか
そうだな今度の日曜なんてどうだ？」

「は？な、何の事だよ？（何かマズイ気が……）」

「だからさ、今度の休みに映画を見ようって事だよ。キミの約束どおり手を繋いで」

（終わった……）

「どういう事ですの、一夏さん！」

「手、て、テ、て、手を繋いでですってえ！」

「嫁には、教育が必要なようだな……」

「ち、違うって皆、見ろってあのアイビスの顔、明らかに嘘ついて

るだろ！」

全員が、野次馬も含めた全員が振り向く。

「（そろそろか…）フフフ……」

「「……………」」

「わたくしは信じていましたわよ、一夏さん！」

「も、もちろんよね」

「うむ、私が嫁を疑うはずが無い」

「お前達な…」

「フフフ……一夏」

「な、何だよアイビス」

「いや、悪かったなーと

少しからかい過ぎたようで」

「本当だぜ、もうやめてくれよ？」

「……」

それで、だ

お詫び、と言うわけではないけど。プレゼントがある」

「ぷ、プレゼント？」

「嘘じゃないから、警戒してくれるなよ

昨日の試合、結局あの一試合以外は中止になったけど勝ちも勝ちだから。

その記念みたいなもの、だから当然シャルロットにも…

よっと、プレゼントがある中身は似たようなものだけど」

言って、二つの袋を取り出し、両の手の平ですっぽりと包めてしまふ程度の大きさのそれを突き出す。

「うおっ、何だ？」

このサイズだと、クッキーとかか？」

「あー…いや、そういう洒落たものじゃないな

そういうの方が良かったかな…」

「そんなこと無いよっ、おめでとうっていう気持ちで送ってくれたんでしょ？」

何だってうれしいよ」

「そっか：良かった

あとこれと、これもあるよ

こっちが一夏ので、こっちがシャルロットの」

言いつつ、二回りほど大きい袋をまた取り出し渡ししてゆく。

「はじめに渡したのは、両方とも同じだけど

これは役に立ちそうなのを別々に考えたからきつと役に立つと思うよ」

「へー、何だろう？」

「ここで開けても良い？」

「どうぞ

一夏も、きつと役に立つ」

「そうだな、どれどれ

んー？これは：レンチ、って事はないだろうし、何だ？」

「僕のは：手？」

受け取った二人だけでなく、半ば蚊帳の外になりながらも様子を伺っていた少女たちもが疑問符を浮かべながらそれら用途不明品の送り主を向くと、待っていましたと言わんばかりのドヤ顔で病的に白い少女が語り出す。

「特殊連装マシンガンWAFinger二丁に、エナジーパック
KEEP-MALUM

二人のISの扱い方に、きつとマッチするはずだよ」

「：あー、せっかくくれた所にこんな事をいうのは何なんだけどさ、白式にはイコライザが使えないこと忘れてないか？」

「だぁーい丈夫だよっ、それは継戦能力向上型パッケージとして仕上げてるから、問題なく装備できるはずだよ」

「おおっ、それなら大丈夫：なのか？」

「大丈夫だよー

説明を続けると

はじめに渡した袋、それに入ってるのはOP-SSCRとOP

—E／S C Rの二つで、

両方共をI Sに適用すれば、装甲が理論上15%向上する」

「凄いな、

俺はまだまだヘタクソだから、これは滅茶苦茶助かる、ありがとう
な」

「ふへへ、照れるぜ」

「そうだ、シャルに渡した方のフィンガーって…うわっ！

なんだ三人ともどうかしたのか？」

「……え……ん……」

「は？」

「そんな出鱈目なモノ、ありえせんわ……………!!!!!!」

4（後書き）

WE ARE NOPLANな、4でした。

と言う事で、以下要解説部位

前回からのあらすじ

要するに、3と4の間にある原作通りでカットしたところで、直接繋がる部分を緩々に書いてだけです。

魔改造エム

BT版試作フラッシュシステムです、この話のエムはこういう感じに進んでいきます

ワナ

今回はパルヴァライザーへのアプローチが主目的で、退いた一夏には目もくれませんでした。

主人公の言葉遣い

アリーナでは、緊急事態のため猫が脱げました。

日常パートでは一度言葉が乱れたので、半ば諦めているのと一夏きゅんに対する好感度が（友情的な意味で）上昇したため、所々で素が出かれています。

領域離脱

主人公の立場は確固とした物であるとは言えないので、学園の敷地外に出た時点で諦めました。

プレゼント

主人公的にはちょっとしたサプライズプレゼント程度の認識。

初のLR以外からのパーツ群なのは、せっかく出来た友人が怪我をしないようにと言う主人公の意思の表れ、なのでFingerは当然PP仕様で電池もSL仕様。

継戦能力向上パッケージ

実際には、それともまた違い、電池を装備した上でパッケージを適用できる半パッケージ的装備。パッケージと言ったのは、とりあえずの解りやすさを優先した。

ちよろかわ

納豆レーザーから続いたバーンダメージの連鎖でとうとう限界を迎えて軽くトんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7570q/>

IS P

2011年4月4日19時31分発行